

Library Week 2017 企画

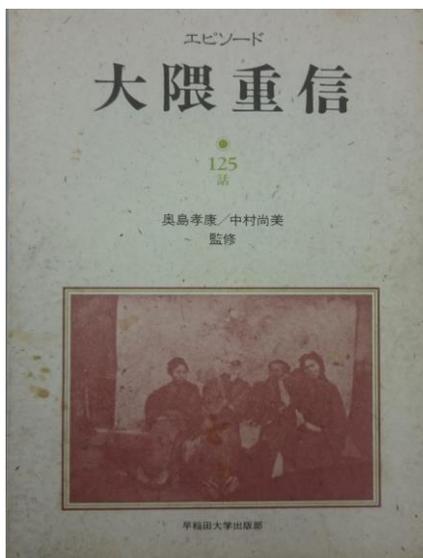
～早稲田大学図書館スタッフが選ぶ～

「こんなときに読んでほしい本」



日々、様々な本と接する早稲田大学図書館スタッフが選んだ19冊。
気になる本を見つけたら、読んでみませんか。

“良書をはじめて読むときには新しい友を得たようである。前に精読した書物を読みなおす時には旧友に会うのと似ている。”
—オリヴァー・ゴールドスミス『新世界人』



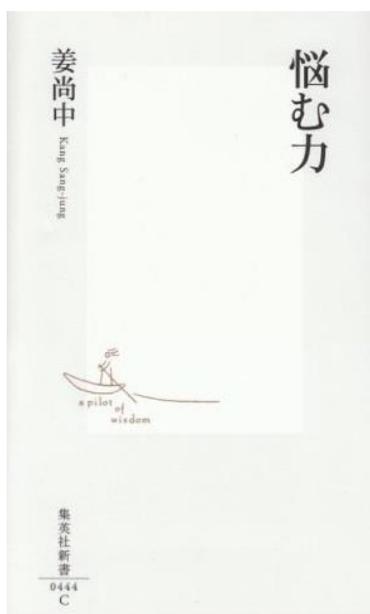
早大創業者・大隈重信について知りたいとき

エピソード大隈重信 125話

エピソード大隈重信編集委員会 [編] / 早稲田大学出版部, 1989

大隈重信ってどんな人？ この問いかけに、早大生であれば恐らく100%近くが、「早稲田大学を創った人」と答えることができるでしょう。もう一歩進んで、「明治・大正の政治家で、二度に亘って総理大臣になった人」位は言えるかも知れません。が、それだけではありません。大隈さんは知れば知るほど奥深い人物なのです。明治維新が成ってから新政府に仕えた大隈さんは、日本初の鉄道を新橋-横浜間に開通させたり、通貨の単位を「円」と定めるなど現代においても国の基盤となる偉業に携わっています。その一方、字が下手なのをコンプレックスに感じていて、生涯人前で字を書かなかったという変わった一面も。それを補うため、メモを取らずに何でも記憶してしまう超人的な記憶力の持ち主でもあったそう。本書はそういった大隈さんにまつわる様々なエピソードを、125話集め平易な語り口でまとめたもの。大隈さんのことを知りたい全ての早大生にお勧め。

(Hill)



悩みでいっぱいとき

悩む力

姜尚中 [著] / 集英社, 2008

悩みを抱え、悶々と過ごしているあなたへ。悩むことは悪いことではありません。著者は青春時代、「悩みの底に沈滞していて、答えの出ない問いにもがき苦しんでいた」と書いています。本書では、個人の自由が拡大し、生きる意味を自分で探さなければならない現代こそ、「悩む力」が必要だと書いています。夏目漱石とマックス・ウェーバーを手掛かりに、自我、金、知性、青春、宗教、働くこと、愛、死、老いまで、深い考察がシンプルな文章にまとめられています。なお、2012年に出版された続編「続・悩む力」では、東日本大震災を経て大きく変化した社会をふまえ、より深い考察が書かれているので、併せて読むことをおすすめします。

(サミハナヤ)



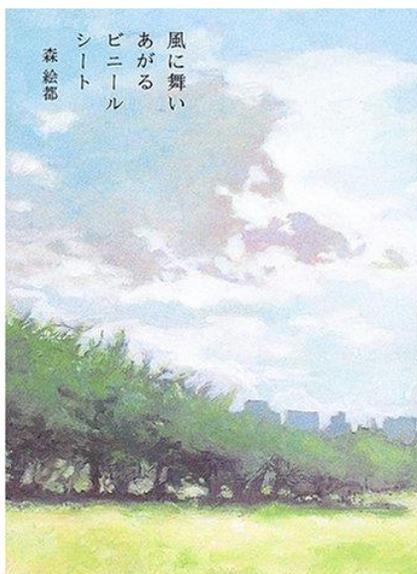
夢中になれるものがみつからないとき

聖の青春

大崎善生 [著] / 講談社, 2000

村山聖(さとし)。1998年29歳の若さで逝ってしまった天才棋士。将棋の知識もなく村山聖のことも知らなかった私ですが、この本を読んでから彼のことが頭から離れず、悩んだときはいつも考えるようになりました。聖ならどうするだろうと。5歳で重い病、腎ネフローゼを患った聖は、病院のベッドで将棋に出会います。夢は名人になること。師匠森との濃密な師弟関係、高熱を出し倒れながらも対局に向かう壮絶な日々、ライバル羽生善治への憧れ…。「青春」という言葉がこんなにも眩しく残酷に感じたのは初めてです。どんな状況になっても決して夢をあきらめなかった聖は、病気のことを恨むことはなかったといいます。なぜなら病気が将棋と出会わせてくれたから。マイナスだと思っていたことが夢を連れてきてくれることもあるのです。松山ケンイチ主演の映画も素晴らしいので、ぜひ観てください。

(きりん)



大切にしたいものを見つけたいとき

風に舞いあがるビニールシート

森絵都 [著] / 文藝春秋, 2006

早稲田大学出身の著者による6つの短編集。年齢や社会的な立場などが異なる登場人物たちが、周囲の刺激を受けながら、「自分が大切にしたい何か」を追い求め、奮闘する姿が描かれています。当然のことながら小説の世界でフィクションですが、なぜか自分の身近に登場人物がいそうな読後感を覚えました。みなさんも、自分が共感できる人物に出会えるかもしれません。作品の一つ、「守護神」は改組前の第二文学部が舞台となっていて、早大生のみなさんにはぜひ読んで頂きたい作品です。私は、本書の2つ目の短編、「犬の散歩」で思わず涙してしまいました。みなさんのお気に入りの作品をぜひ探してみてください。

(きび)



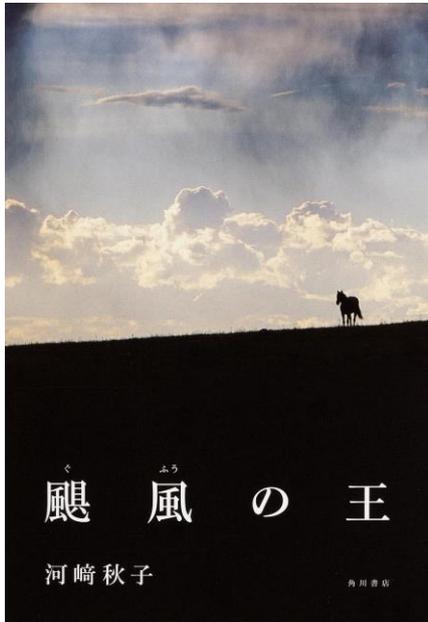
好きな人がいるとき

愛すること

エーリッヒ・フロム [著], 鈴木晶 [訳] / 紀伊国屋書店, 1991 (初版:1959)

「愛すること」について徹底的に考えた本です。世の中にあふれる恋愛本では「愛され方」ばかりがクローズアップされ、「愛し方」を説いた本はないと言っても過言ではありません。ドイツの研究者・フロムによって1959年に書かれた本書は、今日まで世界中で読まれ続けている名著です。著者は、「愛すること」は誰でも自然とできるものではなく、愛は技術であり、本当に人を愛するためには人格を発達させることが必要だと書いています。恋愛を中心に、親子の愛、隣人愛、自己愛、神への愛など、幅広く愛について書かれ、同時に「愛すること」が難しくなっている社会背景についても鋭い切り口で書かれています。半世紀以上前の本ですが、今の時代にさらにフロムの言葉の重みが増しているように思います。本書を読めば、愛が「何となく美しいもの」ではなく、もっと深くはつきりしたものに感じられます。そして、あなたの恋人だけでなく、家族、友人など、全ての人との関係を見つめなおすことができるでしょう。

(サミハナヤ)



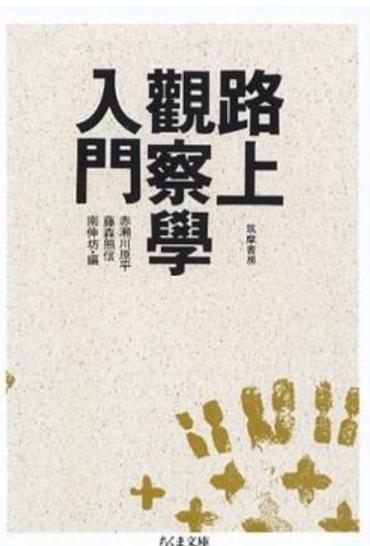
ここは耐えるぞ！というとき

ぐふう 颯風之王

河崎秋子 [著] / KADOKAWA, 2015

明治時代の初期、新聞広告をみて開拓民として東北から北海道に渡ることを決めた捨造。1頭の馬とともに旅立ちますが、捨造とその馬は、実は生まれる前から不思議な縁で結ばれていました。そして馬との結びつきは、現代に生きる捨造の子孫まで受け継がれていきます。これは、厳しい北国の自然の中で生き続ける人と馬の物語です。筆者の河崎秋子の本業は、なんと羊飼いです！北海道で羊を育てながら小説を書いています。さすがは地元民、自然の描写はとてリアルで、読んでいると風の唸りが聞こえてくるようです。『明鏡国語辞典』(第二版)によると「颯風」とは「強く激しい風」という意味だそうです。登場する人物と馬たちは、激しい風に何度も襲われながらも耐え続けます。その姿勢は、読む人にきっと力を与えてくれると思います。2014年「三浦綾子文学賞」、2015年「JRA 賞馬事文化賞」を受賞。

(どさんこ)



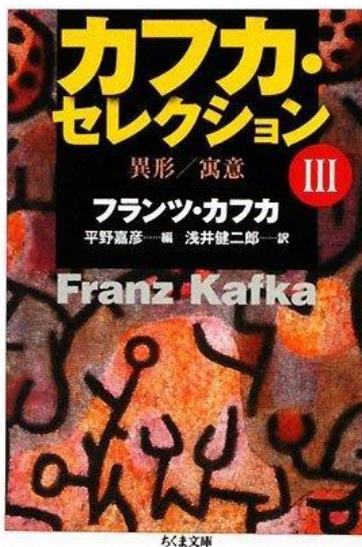
ものの見方について考えるとき

路上観察学入門

赤瀬川原平, 藤森照信, 南伸坊 [編] / 筑摩書房, 1993 (初版: 1986)

これはまずは街の見方、歩き方の本です。トマソン(どこへも行けない階段のように、一見目的不明なのに美しく保存されている不動産の附属物。詳しくは本書参照)を発見した赤瀬川原平、建築史のフィールドワークから看板建築という概念を確立した藤森照信、貼り紙を研究したイラストレーター南伸坊、マンホールの蓋の写真集で世に知られた、森羅万象の収集家林丈二らが、いかに街を見たのかを記録しています。が、それだけに留まらず、この本はものの見方を変えると、価値を変えることができるということを教えてくれます。なお、筆頭の著者、赤瀬川原平は現代美術の作家で、1960年代には様々な立体作品等を通して、人々の考え方の見直しに挑み、表現活動のなかで千円札を手書きで模写して物議を醸したこともありました。他に著書も多く、みな読みやすいのでお勧めです。

(M生)



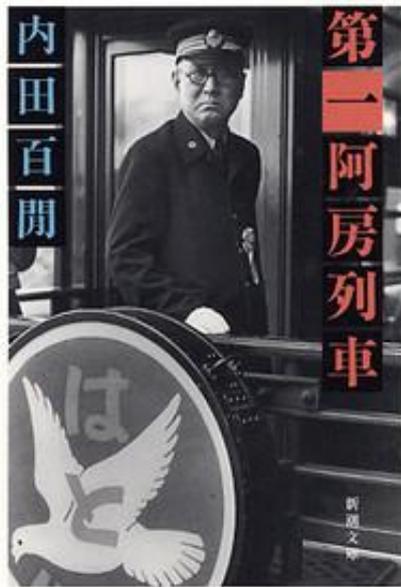
不思議な世界を見たいとき

カフカ・セレクション.3 (異形/寓意)

フランツ・カフカ [著], 平野嘉彦 [編], 浅井健二郎 [訳] / 筑摩書房, 2008

皆さんは平べったい星形の糸巻のように見える、名前を聞くと「オドラデク」と答えて笑う生き物のことを聞いたことがありますか。知らない方は、この本の中の「家父の心配」を読んでください。そうすれば、この物語(たった3ページですが)の話者と同じくらいオドラデクのがりがかりになるはずです。この本は20世紀初めのチェコ出身のドイツ語作家、フランツ・カフカの中・短編を3巻に編集したうちの1冊で、動物に変身する話を集めています。この本を手にとれば、彼の作品中でも最も知られている、旅のセールスマンであるグレーゴル・ザムザがある朝虫に変身してしまう「変身」を始め、人間になった猿や、弁護士会に加わった馬、そして冒頭に紹介した「家父の心配」を体験することができます。なかには理屈っぽくてちょっと辛いものもありますが、読んでみて、そして物語というものの不思議な可能性を味わってください。

(N)



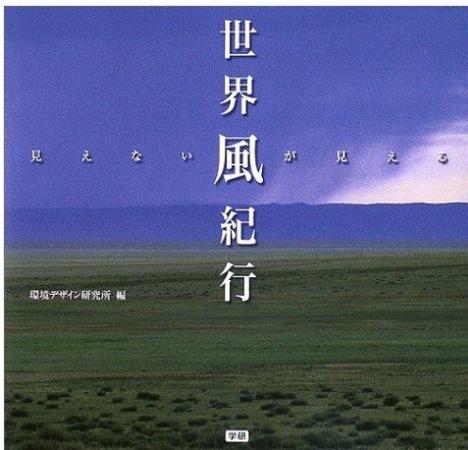
旅に出たくなったとき

第一阿房列車

内田百閒 [著] / 新潮社, 2003 (初版: 三笠書房, 1952)

「用事がなければどこへも行つてはいけないうわけはない。なんにも用事がないけれど、汽車に乗って大阪へ行つて来ようと思う。」これは、本書冒頭の百閒先生の言葉ですが、こんな贅沢な理由で旅に出ることが許されるのは、いまや大学生だけかもしれません。何か強迫観念に駆られるように、「自分を磨くため」、「世界を知るため」、「未知と出会うため」・・・とにかく色々な旅や経験をしておかなければと、無理をしたり急ぎ過ぎたりしている学生が増えたような気がします。ちょっと立ち止まって、のんびんだらりと、ともすれば無為な旅を試みませんか？あてもなく、用事もなく、理由すらなくても、旅に出れば穏やかで贅沢な時間が得られます。そんな旅に出かける際には、ぜひこの『阿房列車』をお手に携えて、旅のお供にしてください。

(なかの)



風に吹かされたいとき、あるいは、風が冷たく感じるとき

世界風紀行：見えない風が見える

環境デザイン研究所 [編] / 学習研究社, 2002

春一番、六甲おろし、空つ風など、日本には風を表す言葉がたくさんありますが、世界中にもその土地々々の風があり、時には恐れをもって、時には愛情をこめて、さまざまに呼ばれているようです。この本は世界各地の局地風から選ばれた100の風を集めた写真集です。例えば、こんな風が。「大地を鞭打つ風／ランドラッシュ(イギリス)」、「ドクター(医者)の風／ケープ・ドクター(南アフリカ共和国)」、「チョコレート屋の風／チョコレロ(メキシコ)」、「空の溜息／イ・ティエン・ティエン・ファン(中国)」。風嫌いの私でも、写真を眺めているうちに、ちょっとその風に吹かれてみたくもなります。風がやけに冷たく感じる日や、向かい風にくじけそうな日も、世界のどこかで誰かが「今日はあの風が吹いているからね、しかたないさ」なんて言いながら暮らしているかと思うと、気持ちも変わってくるかもしれません。

(桜東風)



<東京>に憧れ・軽蔑・その他諸々を感じるとき

とうきょうやわ 東京夜話

いしいしんじ [著] / 新潮社, 2006

(『とーきょーいしいあるき』(東京書籍, 1996) の改題)

「ご出身はどちらですか」「タマチです」「それは…東京ですか？」というやりとりは、程度の差こそあれ経験したことのある地方・海外出身者も多いのではないのでしょうか。「東京」は、彼・彼女らにとって現実味が薄いのです。一方で東京は、早稲田大学のある新宿をはじめとして、街ひとつひとつが際立った特色を持っていますので、それらの街を一括りにしてしまう<東京>は、地元の人にとっても、ある種のファンタジーだと言えるかもしれません。今回おすすめする本は、そんな<東京>の個性豊かな街々を舞台にした18篇を収録した短編集です。生ゴミの回収に厳しい下北沢、宇宙人であふれる原宿、旧き良き日本博物館としての谷中…。なかでも一番のおすすめは「築地」です。日本の漁港市場を舞台に、「タイタニック」もびっくりの大恋愛が繰り広げられます。国や種別や年齢や性別や、様々な違いを丸呑みにして、今日も築地は世界の海を受け入れています。多様なバックグラウンドが集まる早稲田大学に在籍する皆さんにとって、このファンタジーが、ある種のリアリティを持った<東京>物語となれば良いなと思っています。

(とら)



スヌーピーがなぜチャーリー・ブラウンの飼い犬になったか知りたいとき

スヌーピーたちの心と時代：だれもが自分の星をもっている

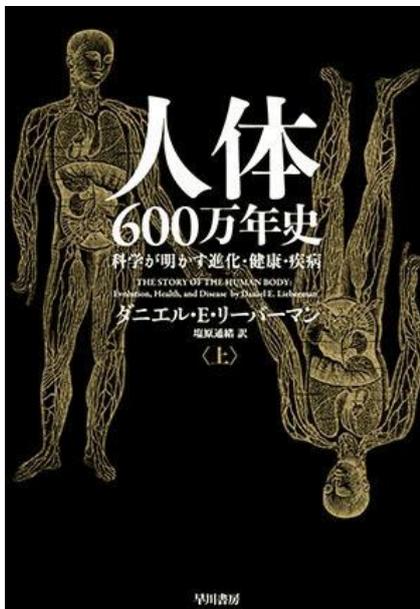
広淵升彦 [著] / 講談社, 2000

(『スヌーピーと仲間たちの心と時代』(1995)の改題)

※早稲田所蔵は1995年版

難しい図書や学術的な資料が置いてあるイメージの強い早稲田大学図書館ですが、実際には手に取って読んでみたくなる本も沢山あります。この本は、スヌーピーが出てくる漫画『ピーナッツ』を、現代社会を取り巻く環境やアメリカの文化を交えて解説してくれる一冊です。これから『ピーナッツ』の漫画を読みたい人や、スヌーピーミュージアムに行く予定がある人にもおすすめの本です。図書館には、好奇心旺盛な学生の皆さんの知的好奇心を満足させる図書や資料が沢山あります。学生生活にお役立てください。

(弁当女子)



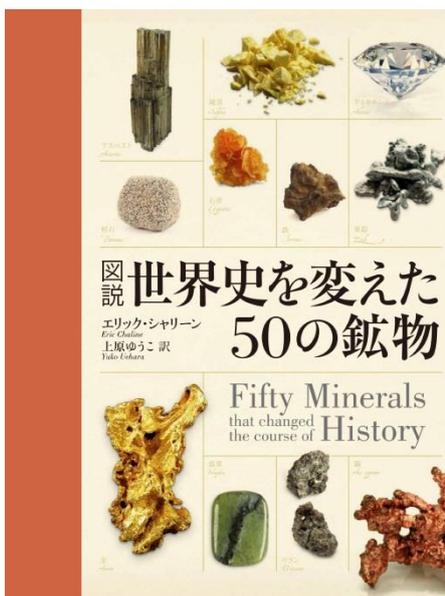
人体の歴史と、現代人が直面する健康の問題について学びたいとき

人体600万年史 科学が明かす進化・健康・疾病 <上・下>

ダニエル・E・リーバーマン [著], 塩原通緒 [訳] / 早川書房, 2015

人類進化生物学の教授による本書は、人間が歩んできた約600万年の歴史の中で、過酷な環境を生き抜くために人類がどのように環境に適応してきたのかを明らかにしながら、現代の人々が悩む病気や健康問題の原因を解き明かしています。狩猟から農耕を中心とした生活への転換、その後の産業革命や快適な生活を可能とする各種の「発明」により、長い期間をかけて進化してきた人間の身体の特徴に適応できていないミスマッチの状態が生まれていることが、現代の多くの不健康、病気の主要な要因と位置づけられています。「生活習慣病の予防」や「ダイエット」が多くの健康番組で取り上げられる昨今。様々な情報に振り回されて、安易に健康に良いとされるものに飛びつくのではなく、科学にもとづいた確かな知識を身につけて健康に生きていくためのヒントが得られます。

(きび)



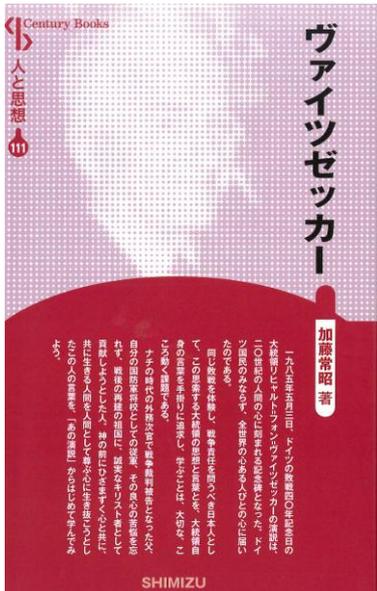
鉱物が地球人に与えた影響を知りたいとき

図説 世界史を変えた50の鉱物

エリック・シャリーン [著], 上原ゆうこ [訳] / 原書房, 2013

「鉱物」と言っていますが、幅広く、金属、合金、岩石、有機鉱物、宝石の原石などを取り上げています。専門書ではなく、人類の歴史と絡めて楽しく読み進めるよう紹介されています。あえて日焼けした古書のような装丁にするなど、作り手のこだわりも楽しめます。幼い頃、いろいろな図鑑を観てわくわくした気持ちが甦るのではないのでしょうか。なお、同じシリーズとして、「動物」、「植物」、「機械」なども刊行されています。

(エルマー)



<言葉の力>を感じたいとき

ヴァイツゼッカー

加藤常昭 [著] / 清水書院, 1992

大学に入学してすぐの頃、ドイツ人の語学講師に「日本人の若者は過去について知らなさすぎる。また、国や自分たちの将来について建設的な意味でのビジョンが無さすぎる」と言われ、衝撃を受けました。一言も言い返すことができず、すごすごと教室を後にし、中央図書館の入館ゲートをくぐったところで、「では、ドイツは、分断と冷戦の中でどのように歩んできたのだろうか?」と思い、蔵書検索システムを駆使し行き着いたのが本書でした。ドイツの第6代連邦大統領(在任:1984年 - 1994年)、リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー。彼の演説で最も有名なものは、『荒れ野の40年』と題する、1985年5月8日の連邦議会演説です。それまで「演説」というものにあまり触れたことのない私は、この『荒れ野の40年』に「人種や言語などを超越し、<言葉>にこれほどまでに人の心を揺さぶる力があるのか」と、その日2回目の衝撃を受けたのを覚えています。文学とはまた違う、演説から「言葉の力」を感じてみたい方に、是非お勧めいたします。

(MK)



教科書では習わない<歴史の奥深さ>を堪能したいとき

平家後抄 : 落日後の平家 <上・下>

角田文衛 [編] / 講談社, 2000 (初版:朝日新聞社, 1978, 1981)

源氏の世に編纂された『平家物語』では、平維盛の子、平家の最後の嫡流六代の斬刑により「平家は永く絶えにけり」と結び、大学受験までの日本史では実際に平家は壇ノ浦で滅亡したかのように学びます。しかし、実際には、壇ノ浦の惨敗の後、都に帰還した平家の女性たちにより平家の血筋は皇族、貴族の中に脈々と生き続け、現代まで続いています。本書では膨大な資料を基に平家の血流がいかにたくましく受け継がれてきたかが詳細に記されており、むしろ、源実朝の暗殺後、頼朝の血筋の途絶えた源氏将軍のぼうが「諸行無常」をあらわしているのかもしれないな・・・など、教科書では習わない歴史の奥深さ、興味深さを堪能することができます。これまでとは違う角度から歴史を旅してみたい方は是非手に取ってみてください。

(Jasmine)



歴史を見つめ直したいとき

戦争まで : 歴史を決めた交渉と日本の失敗

加藤陽子 [著] / 朝日出版社, 2016

中高生に向けての講義録ですが侮らず、ぜひ手に取ってほしい一冊。満州事変とリットン報告書・日独伊三国軍事同盟・日米交渉という、戦争に突入するまでの大きな3つの局面にスポットを当て、史料を丁寧に解説し対話します。読後は、「歴史」とは一本の線ではなく、立体であることが感じられるでしょう。「難民への敵意をむきだしにした排外主義的な示威運動なども起きています。このような恐れや感情、そして、愛する人が殺害されるのを見殺しにしていのかといった、強い感情が出てくる瞬間が、日本においても将来、きっとある。」(p.97)「将来、きっとある」その瞬間、あなたはどうか対峙するでしょうか。未来を創っていく当事者として、今、歴史を見つめ直してみませんか。2017年「紀伊國屋じんぶん大賞」を受賞。

(Puente Alto)



「戦争なんて遠い昔のこと」と思ったとき

この世界の片隅に <上・中・下>

この史代 [著] / 双葉社, 2008, 2009

この冬多くの映画賞を受賞したアニメ映画『この世界の片隅に』は、小規模公開からの異例のロングラン上映や、クラウドファンディングで資金を集めたことでも話題になりました。片渕須直監督が映画化を熱望した原作がこの漫画。皆さんと同世代のすずさんが戦時中広島に嫁いで、厳しい状況の中でもご飯を作ったり絵を描いたり、笑ったり喧嘩したりしながら普通に暮らしていく「生」の記録を丁寧に描いています。そこにはその年頃ならではの恋心や嫉妬もあり、きつと隣にいる女の子の物語のように感じられるはずです。著者がTVインタビューで話していた言葉にはっとしました。「私たちは戦争を生き延びた人からしか生まれてきていない。そのことを誇りに思う」そう、戦時中を生きたすずさんも私たちも、みんなつながっていて現在があるのだと気づかせてくれる本です。

(きりん)



未来を覗いてみたくなったとき

<インターネット>の次に来るもの： 未来を決める 12 の法則

ケヴィン・ケリー [著], 服部桂 [訳] / NHK 出版, 2016

過去 30 年のテクノロジーの変化のルーツを紐解くことで、これから先の 30 年を示す一冊です。人工知能、VR、ビッグデータ、IoT などなど、何やら最先端のキーワードがたくさん登場します。BECOMING、COGNIFYING、FLOWING …など 12 の章から成りますが、すべて ing 形なところが肝です。「デジタル世界に踊り出てくる突き抜けたテクノロジーに遭遇すると、まずはそれを押し戻したいという衝動に駆られる(中略)。それより目を見開いて警戒しながらも利用する方がずっと上手いく。」(pp. 9-10) まずはテクノロジーを知りましょう。知った上で、想像し理解し仮説が立てられるあなたは、未来に警鐘を鳴らすことも、ゴーサインを出すこともできるはずですから！

(Puente Alto)

<インターネット>の次に来るもの
未来を決める 12 の法則

THE INEVITABLE:
UNDERSTANDING THE 12 TECHNOLOGICAL FORCES THAT WILL SHAPE OUR FUTURE.
BY KEVIN KELLY

NHK出版

Library Week 2017 春 ～早稲田大学図書館スタッフが選ぶ～ 「こんなときに読んでほしい本」

発行者：早稲田大学図書館 発行日：2017年4月10日

- ★感想をお寄せください！中央図書館設置の感想ノートにご記入いただくか（4/10-28）、メールで lib-tenji@list.waseda.jp まで。
- ★紹介本は 4月10日～14日の間、中央図書館に展示するため、閲覧・貸出は 4月15日（土）以降となります。（一部、貸出中のため、15日以降も利用できない本があります。）
- ★所蔵場所は WINE または巻末のリストをご参照ください。
一部、図書館に所蔵していない本もあります。
- ★本リーフレットのカラー版は、こちらからダウンロードできます→
右の QR コードが読み込めない方はこちらから↓
<https://www.waseda.jp/library/news/2017/03/06/3347/>
（早稲田大学図書館ホームページ Library Week 特設サイト）
※一定期間経過後はダウンロードできなくなります。

